

身の丈超えぬ発言に希望

作家 高橋 源一郎



たかはし・げんいちろう 1951年生まれ。『優雅で感傷的な日本野球』で三島由紀夫賞。他の作品に『「悪」と戦う』『官能小説家』など。政治や社会に関する論評にも定評がある。写真は鈴木好之撮影。

東北を地震と津波が襲った3月11日から何日かたって、東京から新幹線に乗った人がいた。車両は、子ども、というか赤ん坊を連れた母親ばかりで、通路には、何台も乳母車（バギー）が置かれていた。その人は、最初、母親と子どもの団体が乗りこんだものと考えた。だが、通過する駅ごとに、母親と子どもが消えてゆくを見て、偶然、同じ列車に乗り合わせたただだとわかった。母親たちは、手短かに情報を交換し、「義援金を送ったわ」といい、それから、目的地に着くと、「ごきげんよう」と残る母親にいつて降り立った。破壊された原発から流出した放射性物質による汚染を恐れて「疎開」する母親たちだ。その人は、母

親たちが、情報を鵜呑みにすることなく、自分の「身の丈」に従って取捨選択し、行動している様子を、好ましい、と感じた。そうわたしに話してくれたのは、66年前の3月10日、東京大空襲で10万人が亡くなった時、炎の中を逃げまどい、かろうじて生き残った人だった。



「論壇」ということが、社会的なテーマについて議論をする場所、を意味するならば、2011年3月11日以降、この国のあらゆる場所が「論壇」になった。いわゆる「論壇雑誌」だけではなく、テレビや新聞を筆頭にマスコミやインタ

ーネットから、ふだんは芸能人のゴシップやアイドルの水着写真を掲載する雑誌にまで、「震災と原発」をめぐることが溢れた。わたしたちすべてが、否応なく「論壇」に参加するよう求められた。あるいは、「巻き込まれた」のである。「震災」をめぐる、膨大なことばたちには、いくつのはっきりした特徴があるように思えた。一つは、この「震災」を、66年前の「敗戦」になぞらえるもの。その代表が、御厨貴の「『戦後』が終わり、『災後』が始まる」(1)だ。御厨貴は、「3・11」を、2001年のアメリカ同時多発テロ「9・11」と比較し、関東大震災と比較し、東京大空襲や敗戦と比較し、時代を画するものと位置

①「『戦後』が終わり、『災後』が始まる」(中央公論5月号)



御厨貴氏

②<http://twitter.com/#!/hazuma/status/53735915352358912>



東浩紀氏

③「城南信用金庫が脱原発宣言～理事長メッセージ」(<http://www.youtube.com/watch?v=CeUoVA1Cn-A&feature=youtu.be>)

ネットからの引用は執筆時点のもので。一定時間後、読めなくなる場合があります

しける。御厨だけではならぬ。「論壇」のことばは、「一斉に、まるで示し合わせたように」、「敗戦」や「空襲」や「焼け跡」が蘇った。不思議なのは、それを経験したことのない世代までが、過去の風景を蘇らせたことだ。崖から落ちる者の脳裏には、落ちてゆく僅かな時間で、過去のすべての風景が蘇るところ。ならば、「3・11」といって、壊れ落ちた日本が、日本人が忘れていた過去の記憶の封印を解いたのかも知れない。

「敗戦」に次ぐ、「第二の」「敗戦」であるなら、かいつくろひあつたやうに、わたしたちは、「第二の」「復興」を目指せばいいだけだ。困難かもしれないが、複雑な道筋ではない。だが、実際には違つたのである。

そのとまどいを、東浩紀はツイッター上で正直に「戦中」について(2)。「多くのひとが言っているとおり、この一連の事件は66年前の敗戦とどこか類似している。しかし問題は(震災数日後に起きた)それが『戦後』に似ているのか『戦中』に似ているのか。戦後に比べれば日本はこれから復興に向かい希望ももてるが、戦中に比べるならむしろ暗くも暗くもしたたら、わたしたちが向かおうとしているのは(第二の)『戦後』ではなく、(第二の)『戦中』ではないのか。だとするなら、わたしたちが目の前にしている『戦争』とは、何だろうか。成長期を過ぎ、衰退の道を歩み始めた、この国がなすべきはなにならぬ『復興』の困難な戦いのことだろうか。終わりの見えぬ『原発』收拾への道なのか。あるいは、『原発推進派』と『反原発派』の、憎悪の応酬にも似たやりとりのごとものだろうか。それらすべてを含めた、霧のように霞んで見えぬ未来を

「論壇時評」は毎月の最終木曜に掲載します。今月から筆者が高橋さんに代わりました。「あすを探る」は論壇委員が毎月交代で書きます。新しい委員と担当は、小原英二さん(慶応大学教授) = 思想・歴史 酒井啓子さん(東京外国語大学教授) = 外交 菅原琢さん(東京大学特任准教授) = 政治 濱野智史さん(批評家) = メディア 森達也さん(映像作家) = 社会 「注目の論考」は委員会の討議を参考に執筆しています。



前にして、立ちすくむしかないことが、わたしたちに「戦争」を感じさせるのだろうか。

わたしが目にした「論壇」のことばは、「震災」以前のものと、ほとんど変わりがなかった。新しい事態を説明するためのことばを、多くの論者は、持ち合わせていないように、わたしには思えた。そのせいだろうか、この1カ月、わたしが目が醒める思いで読んだのは、「論壇」以外のことばだ。それは、たとえば、城南信用金庫の「脱原発宣言」であり、ユーチューブ上で公開された、理事長のメッセージだった(3)。

そこで目指されているのは、すっかり政治問題と化してしまった「原発」を、「あつちの」「人びとの手に取りもどすことだ。」「安心できる地域社会」を作らねば、」「理想があり哲学がある企業」として、「できることから、地道にやっつけていこう」といふ、彼らのことばに、難しいところはないし、目新しいことが語られているわけでもない。わたしは、「国策は定められたものだった」という理事長の一言に、このメッセージの真骨頂があると感じた。「原発」のような「政治」的問題は、遠くで、誰かが決定するもの。わたしたちは、そう思いこみ、考えまいとしてきた。だが、そんな問題こそ、わたしたち自身が責任を持って関与するしかない、という発言を企業が、その「身の丈」を超えずに、してみせること。そこに、わたしは「新しい公共性」への道を見たいと思った。

壊滅した町並みだけではなく、人びとを繋ぐことば「もまた『復興』されなければならぬのである。